

# 東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（7）

木 畑 和 子

## 8. ソ連占領地区／ドイツ民主共和国への帰国

スターリングラード戦の後、イギリスの自由ドイツ青年同盟（FDJ）の視野には戦争遂行協力の他、ドイツへ帰国して再建に協力するという戦後の課題も入ってきた。本稿では、インタビュー対象者それぞれが帰国を決断した状況と、帰国直後の生活を扱っていく。

1944年5月第4回FDJ大会の議題には、戦後の帰国問題（第三国への出国を含む）や戦後の生活のために教育機会を設けること、イギリスの職業・高等教育のコースや青年組合・教会などが提供する教育機会の利用の推奨などが含まれていた。1945年6月、FDJは早期帰国を望む声明を出し、新たな民主主義国家建設のためのFDJ委員会を構成した。FDJは世界青年会議や労働組合、教会や議員とのつながりを利用しつつ、メンバーたちの帰国、イギリスの国籍取得、第三国への出国という三つの道への支援を行ったが、ドイツへの帰国を決意することは、他の多くのドイツの亡命青年たち同様、FDJのメンバーにとっても必ずしも容易なものではなかった<sup>1)</sup>。

イギリスに政治亡命していた者のうち約60パーセント（約6000名）がドイツに帰国したが、ユダヤ人亡命者に関していえば帰国したものは2パーセントにすぎない<sup>2)</sup>。家族や親戚が無残な殺され方をしたこと、また家族を失った結果、生活基盤も失ったことが決定的であったことはいうまでもないが、戦後の混乱状況にあるドイツに帰国するより、親類などがあるアメリカ合衆国に出国すること、あるいは軍隊などで培った人間関係をもとにイギリスに残ることのほうがより現実的な道であった。

少なくとも FDJ の活動家にとっては、綱領やそれまでの活動の内容からして、帰国は義務ではなかったものの当然のことであった。とはいえ活動家の中でも帰国しない人もいた<sup>3)</sup>。本稿で扱う人々も、全員が迷いもなくドイツへ帰国したわけではない。

帰国を決意した人々がそれを実現できるまでには時間がかかった。イギリス政府は、亡命者を帰国させて軍政下の占領政策に用いるよりは、行政に通暁したドイツにいる官僚の手腕を利用することの方に期待していた。亡命者たちはむしろ潜在的トラブルメーカーだと考えられたのである。そのため亡命者が、イギリスで地元の議員や労働組合などに口添えを頼み、イギリス政府に何度帰国申請しても、政府は帰国を希求する気持ちはよく理解するが、輸送機関も不十分で、ドイツでは食料、宿泊施設などが極端に不足しており、軍政府が帰国を許可するのは難しいという同じ返事を繰り返した。他方、ソ連の軍政府は亡命者を使おうとしていたが、その対象は基本的にはモスクワに亡命した人々であり、イギリスへの亡命者ではなかった<sup>4)</sup>。

帰国までに FDJ が行った活動のなかには、ナチ犯罪に対する贖罪の活動も含まれていた。FDJ のメンバーが、強制収容所から解放されイギリスに連れてこられたユダヤ人の子供（注31参照）が入院していたサナトリウムや病院などで働いたのである。このインタビューの対象者の中ではヘンドラー⑨がその活動を行っている。また、占領にかかわる通訳・翻訳の業務を行うなど、その英語能力とドイツ出身であることを生かした仕事に就いた FDJ のメンバーもいた。ドイツのイギリス占領地区に駐屯していた FDJ メンバーの軍人のなかには、その地での青年組織建設に協力した者もいる<sup>5)</sup>。以下で述べるソ連占領地区での FDJ 創設に先立って、西側占領地区のそれぞれに FDJ が設立された<sup>6)</sup>。

在英亡命者組織は1945年末以降、活動を停止していった。FDKB は45年12月に、FDB は翌2月に活動を停止した<sup>7)</sup>。一方ソ連占領地区では、ソ連軍事委員会の承認により、エーリヒ・ホーネッカーのもと反ファシズム中央青年委員会を基盤として、後述するように新たな FDJ（46年3月7日）が創設された。ホーネッカーが議長に就任した。イギリスの FDJ 第6回国大会（同年4月28、29日）は、このソ連占領地域の FDJ との合併を決議した。その結果、イギリスの FDJ は海外支部という位置づけとなり、47年夏の終わりに活動を停止することになった。

この第6回大会で第2回大会以降議長を務めていたホルスト・ブラッシュが議長に再選されたが、彼はその後すぐにドイツに帰国することになった。彼に代わり、短期間ではあるがアルベルト・クレーベルグが実質上最後のイギリスのFDJ議長となった。1946年4月当時のイギリスのFDJメンバーは196名で、うち96名がイギリス軍に入隊しており、3名が外国に、97名がイギリスにいた。かつては23都市にあった組織もロンドン、マンチェスター、ミッドランドの3グループのみとなった。FDJの機関紙は46年7月27日に最終号が発行されている<sup>8)</sup>。

ブラッシュの帰国は1946年夏であったが、彼らが最も初期の帰国グループであり、他の人たちの帰国は47年春から同年末となった。帰国者数はFDJのメンバーの三分の一の200名以上となるが、全員がソ連占領地区に戻ったわけではなかった。出身地に帰国することが勧められたが、戦後の国境線の変更により、出身地に戻るができなくなった人たちもいる。

ハンブルクに戻る決断をしたFDJのメンバーの一人は、イギリス軍の兵士であったことで、西部占領地区に戻ったほうが、自分の将来を有為なものにできると判断したという。彼はハンブルク大学に入学後、教授から「みんな戦勝国側になだれ込んでいるのに、敗者側に入ろうなんて、狂っている、狂っている、狂っている」と言われた<sup>9)</sup>。

ソ連占領地区へ帰国したFDJ幹部たちは、新たに創設されたFDJの中央・地方機関での仕事を得たり、ジャーナリストや通訳になったりした。後には教師、俳優、作曲家、大学教授、経営指導者、外交官などの仕事に就くようになった人もいる。ブラッシュ、ホルスト・ブリ、ヨッヘン・ヴァイゲルト（ピンクス<sup>⑧</sup>の夫。後述）他2名がこのFDJの書記局の一員となった。他にアドルフ・ブッフホルツはFDJが発行する新聞の編集長に就任し、フライシュハッカー<sup>③</sup>はFDJの雑誌の編集局に勤務した<sup>10)</sup>。

ソ連占領地区でのFDJのメンバー数は創設時に16万人であったが、東ドイツ国家成立時には93万6000人となり、53年2月には200万人（約70パーセントが14歳から25歳）を越える巨大組織となっていた。KPD指導部は戦争終結前から「広汎な民主主義的、反帝国主義的青年組織」の創設に関して言及していたが、このような組織の人事について、創設前モスクワでKPD指導部がどの程度考えていたかは、ほとんど研究さ

れていない。この新FDJにあたって、ドイツ社会主義統一党（SED）は、可能な場合には西側からの帰国者を使い、彼らのイギリスでのFDJ創設の経験を利用しようとした。

他方ヴァルター・ウルブリヒトはソ連の捕虜収容所に収容され、反ファシズム学校で再教育を受けた元兵士に、特別な期待をかけていた。SED指導部はモスクワ帰りであり、「西側亡命者」であるイギリスのFDJ出身者は不利な立場に立たされることになった<sup>11)</sup>。ブラッシュは、プリと並んで、イギリスのFDJ出身者のなかでは、東ドイツ社会では最も高位の政府要職につくことができた人物であったが、シュレーダーによればその彼も警戒心が強かった<sup>12)</sup>。

1952年のメルカー裁判<sup>13)</sup>の際は、イギリスのFDJのメンバーたちの幾人かに西側のスパイの嫌疑がかけられた。メキシコやスイスに亡命していた古参の指導者たちとは違って、逮捕された者は少ないが、失職させられたり、配置換えなどが行われたりした<sup>14)</sup>。本インタビュー対象者でも、フライシュハッカーが一時的ではあるが失職し、ヘルガ・エーレルト②の夫（FDKBのメンバー）は逮捕された。この50年代はじめての冷戦が激化した時代の問題については、主として次号で扱うが、本号でも若干触れることにしたい。

#### ① ウルズラ・デーリング（1921年生）

彼女は戦争中、メイドをしていた母親とよく会った。母が暇を取ることができた時は、レストランで一緒に食事したりした。母にとって、ドイツは殺人者の国であり、他の人と同様、ドイツへの帰国は論外であった。母と病気の弟を残すことが不安で、なかなか帰国の決意がつかなかったが、それでも帰国したのは、駅頭での父親の最後の言葉があったからだ。他の親たちが子供たちに、ハンカチをもったかなどと話しかけているのに、父親は「社会主義ドイツの建設」のための帰国を彼女に呼びかけたのだ。彼女は1950年に帰国した。

ウルズラは東ドイツではユダヤ人は殺害されることはない、東に帰ったが、母親は社会主義国家であってもドイツという国を信用しようとはしなかった。弟の突然の死によって、母親はノイローゼになった<sup>15)</sup>。母親は彼女の子供が生まれて以降、毎年東ドイツの孫を見にやってきた。彼女も一度イギリスに母親を訪ねたことがある。ナチ被害者連盟

(Vereinigung der Verfolgten des Naziregimes) のメンバーの彼女にとって、イギリス行きはそれほど難しいことではなかった。

彼女は「帰国」先としてイスラエルに行く気はしなかった。彼女はイスラエルではユダヤ人はファシストになっていると言う。

彼女には親しくなったイギリス人男性同志がいた。彼女はもしイギリスに残ったなら、その人と結婚して、イギリス人になり、イギリス共産党に入党していただろうと考えている。帰国直後に SED に入党したが、インタビュー当時は民主社会主義党(PDS)の党員である。党員は旧 SED 党員が多く、高齢であり、若い人たちが加わらないのが問題だと彼女は言う。

## ② ヘルガ・エーレルト (1923年生)

彼女がドイツに戻ったのは、夫ヘルマン (1912年生。非ユダヤ人) に対する愛情からだけだった。ヘルマンとはマンチェスターの FDKB で知り合った。彼はマンチェスターの FDKB 議長だった<sup>16)</sup>。彼女は「私の失敗といえば、ドイツに戻ったことだ。イギリスに残るべきだった」と言う。ヘルマンはスペイン内戦の国際義勇軍に参加し、戦後ユーゴスラヴィア経由で帰国したため、帝国主義者の嫌疑をかけられ、夫婦は東ドイツで苦難の道を歩むことになった。

ヘルマンは政治亡命者なので、ドイツに戻ることを考えていた。彼は1933年1月、ドイツで何が起こるか分かっているのに共産党に入ったような人で、彼女はその勇氣に感動した。大学のクラスメートが、明日ヘルマンの逮捕があるという情報を伝えてくれたので、イギリスへ出国した。どういうルートで出国できたかについては彼女は知らない。

彼はマンチェスターで経済学と教育学を学んだ。学資はクエーカー教徒のキャドベリー・チョコレート社主の援助とドイツ語レッスンの謝金でまかかった。その後冗談のようだが魚市場で働いた。とても親切な会社だったようだ。そこでは「魚のエーレルト (Fish Ehlert)」と呼ばれていたという。

1936年、国際義勇軍に参加した彼は、スペインで深い苦しみを味わったと思うが、そのことを一言も話したことがなく、彼女も聞かなかった。知らないほうがよいと思ったからだ。彼女は筆者に DDR に戻った義勇軍参加者についての研究書<sup>17)</sup>を見せながら「ここに書かれているのはよ

く知っている人たちで、この戦いに参加したことは素晴らしいことでした。いろいろな国から、パレスティナからも志願兵が応募してきました」と語った。彼女はまた筆者に軍服姿のヘルマンの写真を見せてくれた。

ヘルマンはこのスペイン内戦で喉のあたりを負傷して、神経をやられたらしく、左腕が動かなくなり、タイプが打てなくなった。そこで彼女は彼の左腕となった。1976年にヘルマンが死亡したのは、スペイン内戦で受けた傷のためだったのではないかという。彼は非合法でイギリスに入学したため、イギリス軍には志願していない。

彼は46年1月に民主主義国家ドイツ再建を支援しなくてはならないとソ連占領地区に帰国したが、彼女は不安からそれを望まなかった。彼女がイギリスで何かできないかと考えていたちょうどその時、マンチェスターのFDJにヨーロッパ作戦戦域のアメリカ軍がドイツ語を話せる民間人を募集しているという連絡があった。彼女をはじめ多くのFDJメンバーが応募した<sup>18)</sup>。アメリカ軍の軍服を着た試験官は37年か38年にドイツからアメリカ合衆国に出国したユダヤ人だった。「彼女は疲れて、ものうい目つきで彼を見ていた」という英文を独文に訳す試験だったが、造作なく答えられ、すぐに合格となった。他に採用された数百人の若者とまずフランスへ行き、パリ近郊のアメリカ軍駐屯地において、軍人としてまた「占領軍」としてドイツでいかに行動すべきかの講習を受けた<sup>19)</sup>。

シュトゥットガルト近くのエスリンゲンで郵便の検閲に配属された。アメリカ軍の軍服を着用し、業務についた。アメリカ軍人たちは彼女たちのことを常に丁重に扱ってくれた。かつてはドイツから強制的に追い出されたが、今度は占領軍の一員として戻り、住居もナチの協力者だった家が宿舎にあてられ、気分はよかった。検閲は、ナチやファシズムと結びつきがあるか、またそのような考えをもっているか、まだ戦おうとするナチの残党の巣窟がないかを調べることや、潜伏した親衛隊や戦犯を探すことを目的としていた。ノイラートやシャハトの手紙を検閲したことを記憶している。手紙の内容が危険かどうかという判断をまかされたことに誇りをもったという。ニュルンベルク裁判の終結とともに、この仕事は終わった。

シカゴ在住のおばが、彼女の両親が申請していたアメリカ合衆国入国

のクオータの順番がようやくまわってきたから、アメリカにくるように勧めてくれた。しかし、ヘルマンはソ連占領地区で経済のエキスパートとしてドイツ経済委員会で働いており、また弟もイギリス軍人としてドイツに駐屯していた。ヘルマンは仕事の関係でアメリカ占領地区にもくることができた。

ヘルマンから離れることも気になったが、とりあえず彼女はアメリカ軍から得た給与で、アメリカ合衆国に行き、ニューヨークのおじに会い、シカゴの親戚を訪ねた。彼らは一緒に暮らそうとってくれた。アメリカには一年滞在したが、彼女のこれまでの体験や彼女の感性と、アメリカ人のメンタリティはあわなかった。またヘルマンがドイツにいたことが重要だった。

1949年彼女はスコットランド経由でヘルマンのいるドレスデンに行った。彼女はソ連占領地にも社員を派遣している婦人下着メーカーの代表という偽の身分証明書を作り、それでソ連占領地域に行くことができたのである。11月にヘルマンと結婚した。彼は当時ザクセンの繊維関連の国营企業の管理者を務めていた<sup>20)</sup>。

### ③ アルフレート・フライシュハッカー（1923年生）

彼は戦時中、金属工場に働いたが、戦後はおもちゃ工場に働いていた。FDJの大きな目標が達成された5月8日はイギリスFDJの活動の区切りとなった。彼は、ドイツにあらたな民主主義国家を建設することが必要であると確信し、ドイツへの帰国準備をしたが、なかなか出国できなかった。

46年末にようやくイギリス内務省から帰国許可があり、47年にドイツに戻ることができた<sup>21)</sup>。帰国費用は自費だったが、どのくらいだったのか、60年前のことで憶えていない。イギリスのパスポートをもってはいない。身分証明書だけである。先に帰国したブラッシュの助けでベルリンへ行った<sup>22)</sup>。故郷のマンハイムにはもはや知っている人もいなかった。妹はドイツへの帰国を拒否し、先に渡りたいとを頼ってアメリカ合衆国へ行った。

帰国の際は、配給制のためになかなか手に入らない洋服や本、食料、代用通貨であるタバコ・石鹼・化粧品・香水などを持ち帰った。

#### ④ クルト・グートマン (1927年生)

彼はイギリス軍兵士として、故郷近くのミュールハイムに駐屯した。そこで母親と長兄の運命を知った。どこかで生きているのではないかというわずかな望みも打ち砕かれた。また子供時代こっそり一緒に遊んでくれた友人とも再会した<sup>23)</sup>。母方のいところにも再会した。いところは妻が「アーリア人」だったので、どうにか労働収容所で生きのびることができたが、収容中の過酷な労働によって、体をひどく壊していた<sup>24)</sup>。他の顔見知りには彼に向かって「お前たちを全部殺しておくべきだったんだ。生き残ったやつらは復讐するだろうし、それを我慢するなんて」と言い捨てた。

彼が歩哨勤務についていた時、歩いてきた3人が彼に向かってナチの行進曲を歌いだした。グートマンはこの3人にドイツ語で停止命令をだしたが、聞かなかったので、空に向かって威嚇射撃をした。彼らはパトロール隊に逮捕され、起訴されたが、起訴事由はナチの歌を歌ったことではなく、停止命令を聞かなかったことだった。また、彼が軍の石炭倉庫の管理を担当した時、党やFDJや知己の同志の家の前で軍用トラックに載せた石炭の一部を「紛失」した。厳寒の中、石炭は貴重品であり、彼は准尉から伍長に降格されてしまった。

1948年に除隊した彼は、ナチのイデオロギーをドイツ人の頭から叩き出すことを目的に、ドイツへ帰国した。しかし、彼の仲間の全員が帰国したわけではない。ユダヤ人だからではなく、キリスト教徒や、共産主義者の中でもドイツに帰国しようとしなかった人たちがいる。彼はルール地方に短期的に滞在した後、ベルリンのソ連占領地区領に行った。出身地以外に帰国する場合には在英ドイツ共産党海外支部の許可が必要だった。彼はパンコウの金属工場で働き始めた。

次兄はイギリスに残った。しかし、次兄がイギリスに残ったこと、自身がイギリス軍兵士であったことは、クルトにとって、DDRでの人生に不利な状況をもたらすことになった<sup>25)</sup>。

次兄はイギリス人になりきろうとしていたのに、戦時中敵性外国人として強制収容されたことに強い衝撃を受けたようだった。次兄はカリタスかクエーカーかの孤児院出身と称して、ユダヤ人だということもドイツ出身だということもおし隠して独身を貫き、2003年にその生涯を終えた。クルトが葬儀の追悼の辞で、ユダヤ人であることに触れたら、彼の



周りの人は非常に驚いていた。兄の台所の引き出しにクルトの連絡先のメモがあって、それで彼に連絡があったのだ。

#### ⑤ ヘラ・ヘンドラー (1923年生)

彼女は1945年3月に結婚し、フライシュハッカーたちと住居を共同で借りて住んだ。戦争終結後、南アフリカにいたおじ<sup>26)</sup>はロンドンに友人を寄こし、ヘンドラー夫妻に会った。おじはヨハネスブルクにホテルを所有しており、彼女たちを南アフリカに呼び寄せようとしたが、その友人は、夫ヴェルナー⑨が労働組合の集会のために中座したのを見て、ドイツに戻ったほうがよいだろうと言った。南アフリカでは、アパルトヘイトでとてもやっていけそうもないし、ヴェルナーはすぐに刑務所行きになると思ったのだ。このようなことでアフリカ行きの話は終わった。

帰国先はドイツとなったが、彼女自身大きな政治的目をもっていたわけではない。彼女は人間にかかわる仕事がしたいだけだった。彼女の故郷のクヴァッケンブルクに戻るといふことの決断は難しかった。彼女は故郷には戻りたくなかったし、夫の故郷はポーランド領となったシュレジエンであるため、故郷への帰国は不可能であった。そのためハンブルクに行った。

1946年にハンブルク港についた。港から5キロぐらい離れたところに住んだが、その場所まで空襲を免れ無傷で立っている建物は一つもなかった。とても寒い冬だった。FDJの友人で、イギリス軍出身者の友人がヴァンツベークに住んでおり、そこへ行った。二人の友人と二部屋を使った。スイス人という家主の女性はそれを快く思っていなかった。夫は放送局で働きはじめた。

彼女は主婦として、戦後の生活を営むのに懸命だった。当時は、買い物一つでも行列をつくらなくてはならず、主婦は大変な仕事をこなさなくてはならなかった。ある日牛乳屋の女主人がチェコのユダヤ人に「あんたがガス室で殺されなくて残念だったわ」と言っていたのを聞いた。なぜそのようなことを言ったかそのいきさつは分からなかったが、その女主人は彼女がユダヤ人ということを知らなかった。彼女はその言葉を聞いてすぐ店を出て、そこには二度と行くことができなかった。その女主人になぜ抗議しなかったのかと思うが、親からは控えめにするように育てられていて、そんなことはできなかった。

ナチスが植えつけた反セム主義は容易になくなるようなことはなかった。このような困難な時代にFDJでの友人や親友にはよく助けてもらった。彼らは終生の友人となった。

#### ⑥ ギゼラ・リンデンベルク (1925年生)

イギリス軍人だった彼女の夫の戦後の任務は西側占領地域でのナチの残党の追跡だった。彼女も妻としてドイツに行き、45年から46年の終わりまでの1年半、アメリカ軍で翻訳業務に就いた。夫とは時々会うことができた。アメリカ軍での仕事を辞めてから、47年までの1年間、夫の駐屯地に住み、その後単身ロンドンに戻り、48年までFDJの青年会館に住んだ。FDJのメンバー多くはドイツに帰国したが、帰国費用は自分たちで払ったと思っている。

ドイツには彼女たちのように反ナチで、生きのびることができた人などほとんどいなかった。そのため、ドイツでの生活は容易なものではなく、情熱がなければとても暮らしていけなかった。当時、多くのドイツ人が、ナチ時代には飢えもなく、ナチ時代のほうがよかったと言っていた。ナチは狡猾だと彼女は言う。占領地区からさまざまなものを略奪し、ドイツ人には豊かさを与えていたのだ。戦後の物資不足に対して、人々は強い不満の中にあっただが、さらに難民が戻ってくるという状況は、決してよいとは言い難いものだった。彼女たちは、その時代、仲間たちと身を寄せ合って生きてきた。

彼女の夫は、二度と過去と同じことを繰り返させないという信念で戻ってきた。時々、もしイギリスに残っていたら、と思うこともあったが、同じ関心を持った人の集まりや、知人の輪というものがあって、勇気を取り戻すことができた。

キングダートランスポートの子供で東ドイツに戻った人は本当に少なかったと言う。その多くはFDJのメンバーだった。直接ベルリンに戻ったのは、多くはベルリン出身の人だった。リンデンベルク夫妻は最初、イギリス占領地区となったベルリン・ヴィルマースドルフに戻った。住宅不足のため、住宅局には亡命前の住所に戻るよう指導されたためである。その後、夫がソ連占領地区のフンボルト大学に入り、経済を学んだ。彼女はベルリン・ルンドフンクで秘書の仕事をしたが、当時ソ連の統制下であり、家賃が払えるような給与ではなかったため、東に移つ

た。

⑦ インゲ・ラメル (1924年生)

彼女は戦争中から帰国を固く決意していた。彼女の姉はドイツへ戻る気持ちは全くなく、イギリス人になるつもりだったが、彼女の帰国に対しては何も言わなかった。しかし、同じくイギリスに亡命していた母方の伯父は彼女の帰国に強く反対した。彼がどうやってイギリスにすることができたのか、またどうやって仕事を見つけることができたのか、それは分からない。彼は義勇軍に入っていた。当時45歳ぐらいだったのではないかと彼女は言う。

彼女は筆者に伯父からの手紙 (45年2月25日付) を読み上げてくれた。

「あなたの手紙には非常に驚きました。……私には理解できないことが多いし、またあなたが選ぼうとする道は誤っていると言わざるをえません……。戦争が終わったら、二つの問題があるのみです。第一は私たちの愛する家族を地獄からできるだけ早く救出すること、そして彼らの受けた苦しみを忘れないことです。第二は非常に難しい問題、あなたが全く触れなかった問題です。あなたが今考えていることよりも重要な、ユダヤ人の問題です。……私たちの優れた人材を他のことに供したいのです。……私たちの力を犯罪者、殺人者の国の再建を助けることに注ぐことはありません。ドイツ人たちはナチの犯罪行為を数年間傍観し、助けたのであり、それはナチ黨員よりも悪いことだと思います。ナチ黨員は命令で行動したのだから。」

彼女は伯父の主張はすじの通ったものではないと受け取り、彼の忠告を無視した。彼には、家族を殺した人々の国に彼女が帰るのは理解できなかったのだ。家族が殺されたかどうか、その時までには知らせがあったわけではなかったが、家族から何も連絡もないので、殺されているとは思っていた。

帰国までしばらくドイツ兵捕虜と話すという活動を行った。一人一時間ぐらいで、彼らにファシズムとは何かということを考えさせることが目的だった。捕虜たちはなぜ戦争をしたのかということも分からないような若い兵士たちだった。

#### ⑧ マリアンネ・ピンクス (1924年生)

戦後、彼女の夫 (ヨッヘン・ヴァイゲルト) の両親はケニアで生活をたてていった。ナチ時代に父親が先にケニアへ出国したが、おってイギリス経由でケニアに行くはずだった義母と義姉は、開戦によってイギリスに留められた。義父は、もし夫婦でケニアにくるつもりがあるならば、彼らのために農場を購入するといってくれたが、夫は絶対にケニアなどには行かない、アフリカ人に撃たれには行かないと言って断った。アフリカの人々が独立し、白人入植者は追放されるということが彼には分かっていたのだ。共産主義者として、搾取からの解放を予見あるいは希望していたのだと思う。彼は植民地の解放という強い心情をもっていた。結局彼の予見した通りになった。ケニア独立の際にはすでに父は亡くなっていたが、義母はイギリスに戻り、アメリカ軍兵士と結婚した義姉はアメリカ合衆国へ渡った。

夫婦はイギリスでより大きな可能性があると思い、また夫は農業の勉強の希望をもっていたが、彼は政治的使命感からドイツへの帰国を選んだ。すでにドイツで政治活動していたブラッシュから手紙があり、心配することは何もない、ヴァイマルかエアフルトでFDJの学校長に就いて欲しいと言われていた。農業も少しできるのではないかと考えていたので、安心してた。実際夫は野菜の種を持ち帰った。彼女も新国家建設のため帰国は義務だと考えており、犠牲的精神をもって帰国した。とはいえ、当時のドイツはまだ食料配給も不十分で、小さな子供を2人連れての帰国は不安だった。下の子供は2月に生まれたばかりだった。47年8月頃、2人の幼い子供を連れて帰国した。母も帰国した。帰国の手続きなど、詳細なことはもう思い出せない。

結局夫はFDJ指導部からベルリンで働くように言われ、彼はベルリンのFDJの文化担当の幹部となり、さらに1949年5月ベルリンのFDJの第一書記に選出された<sup>27)</sup>。彼は大学で農業を勉強することを望んでいたが、FDJの指導部は彼に、農業はあとでもできるからと、政治的な仕事に就くようにさせたのだ。

彼は青年派遣団の一員として、ソ連へ行ったが、ソ連には批判的な印象をもって帰国した。大晦日の日にFDJの学校で講演をしようと言っていたが、その直前の27日か28日に自動車事故にあった。盛大な葬儀が営まれ、ローザ・ルクセンブルクやリープクネヒトなど社会主義者が多く

埋葬されているフリードリヒスフェルデに埋葬された。夫は幹部だったので、もしこの事故で亡くなっていなければ、50年代はじめのメルカー裁判時代に困難な経験をしたと思うし、またもしその時何も問題がなかったとしても、ドイツ統一後に大変だったかもしれないと、彼女は考えている。

イギリスのFDJはすべてのドイツ人青年をできるだけFDJに組織し、戦後その青年たちを帰国させ、民主主義的ドイツ建設を助けるという目的をもっていた。しかしドイツから追われ、家族を殺害されたユダヤ人の子供たちがドイツへ戻り、民主的なドイツを作ることができると信じていたことをまったく理解ができなかった人たちが多かった。今日、人は「そんなことは無理だって分かっていた」と言うかもしれない。

そもそもドイツとはもう関わりたくないという人たちが多かった。彼女は那些人たちの気持ちは、今の方が当時よりもっと理解できると言う。亡命ユダヤ人のなかには今もなお、二度とドイツに足を踏み入れたくないと言っている人もいる。

母親は、向かいに住む人がかつて正真正銘のナチだったので、挨拶をしたくないと言っていたが、彼女の考え方は違った。彼女は、もしその人物がナチの犯罪者であったら、他の人がそのように対応するだろうし、単なる「協調者」であったなら、個人的な憎しみを示してはならないと母親をいさめた。ナチに入党したことを問題にすることはない。もし、自分自身がユダヤ人でなければナチに同調していたかもしれないと彼女は考えている。16、17歳の人たちが抵抗運動に関わったら、殺害される恐れがあったし、若い世代がナチを受け入れたのは、当時としては普通のことだったのだから、彼女はそれを問題にはせず、元ナチでも、ナチの敗北を認識し再建に協力しようとしていた人たちとは親しくしたという。

彼女はナチ時代、占領地における搾取によってドイツ人たちはよい生活を送ることができたというアリの研究<sup>28)</sup>を読んだ。SED指導部は、東ドイツの住民はナチ時代、ナチ側ではなく、ずっと共産主義者側にいたと言いつしたが、それは偽りだ。ただしナチ時代、ユダヤ人迫害に対して一般のドイツ人が傍観者であったことについて、怒りを彼女は抱いていない。これは、ウルズラ・ヘルツベルク<sup>⑩</sup>とは違うところだ。

イギリス時代のFDJのメンバーで固まって生きている人もいるが、

FDJの仲間やユダヤ人で固まることを彼女は好まない。彼女自身、東ドイツ社会でよりよい世界を作りたい思い、よい人たちと一緒に働き、過去のことよりも将来にむけて生きてきたと思っている。

#### ⑨ ヴェルナー・ヘンドラー (1920年-2008年)

自分がなぜパレスティナへ行かなかったのか、それは不正に加わりたくなかったからだと言ふ。一方ドイツに帰国したのは、新たなドイツを創りたいというきわめてナイーブな気持ちからだ。彼はまた他のインタビューで、ヘラ⑤との結婚(45年3月)は、帰国を条件としたと語っている<sup>29)</sup>。

出国までの期間、彼はイギリスのユダヤ人の職業訓練組織(Organization for Rehabilitation through Training, ORT)<sup>30)</sup>で強制収容所から救出された子供たちに木工技術を教えた。ロンドンのサウスケンジントンにあったORTにいた友人から誘われたのだ。これは彼の生涯でもっとも素晴らしい仕事だったという<sup>31)</sup>。教え子の中には、重量挙げでイギリスのオリンピック代表になったベン・ヘルフゴットや建築家になった人もいる<sup>32)</sup>。

彼が帰国前にキャムデンタウンの木工組合に挨拶にいくと、仕事仲間たちはナチが二度と立ち上がらないように頑張ってくれと帽子をまわし、お金を集め餞別としてくれた。大変な金額となった。

#### ⑩ ウルズラ・ヘルツベルク (1921年-2008年)

軍需工場で弾薬製造に従事(検査担当)していた彼女は、出産(1944年)後に、輸送関係の労働組合の事務職に移った。終戦後すぐに共産党員のチェコ・オーストリア・ドイツへの帰国運動が始まったため、レスターからロンドンに移ったが、夫の除隊は最後になった。イギリス軍は一斉に除隊させず、少しずつ除隊させたため、帰国は遅かった。ようやく47年に帰国することができた。

彼女は帰国までの期間、夫が働く捕虜収容所の図書室の選書部門で働いた。ナチ時代には読むことのできなかったフォイヒトヴァンガー、トーマス・マン、ハインリヒ・マン、カフカなどの文学書の他、『共産党宣言』なども選んだ。

彼女はシオニズムを強く批判する。当時彼女は共産主義者として、プ

ロレタリア運動が世界で同時に平等のために立ち上がれば、ユダヤ人問題も解決すると考えていた。イギリスの KPD は青年たちのドイツ帰国を奨励しており、パレスティナ行きは論外だった。新しいドイツを作るために、若者を必要としていたのだ。彼女も西部占領地区ではなく、ソ連占領地区に行くことを目指していた。

しかし、彼女は進んでドイツへ帰国したかったわけではなかった。ユダヤ人の虐殺の写真を見、あらためてドイツ人がユダヤ人に何をしたのか知り、たまらなくなった。また母親もどこでどうなったか全く分からない状態だった。それでも彼女が帰国したのは共産主義者であったからである。政治的亡命者は民主主義的ドイツを創らなくてはならない、というその考え方に納得したからだ。ファシズムと闘わなくてはならない、二度とファシズムが起こらないようにという理想主義のもと、信念を貫いて帰ってきたのだ。

彼女は家族一緒にイギリスの軍艦で帰り、国籍を再取得した。西ベルリンにいた友人の世話もあり、まず西ベルリンに住んだ。住居関係の役所から割り当てられたシュテグリッツのアパートに住み、家具の配給も受けた。子供のミルクも配給だった。東側に比べ、西側には食物があった。49年末になって、東ベルリンへ移った。彼女が以前住んでいた家に行ってみると、見ず知らずの人が住んでいた。全体的な状況は理解できたが、母に関してはずっとあとになって移送の書類がようやく手に入った。

フライシュハッカー③やピンクス⑧などとは違い、彼女は心の底ではドイツ人を決して許せないと思っている。彼女の母親はアウシュヴィッツで殺されたのであり、彼女はどうしてもナチ時代のことを忘れることはできない。今でもドイツに住むのは難しいと感じている。彼女は市電に乗っていても、年上の女性をみると、アウシュヴィッツの女性看守だったのではないかなどと思え、本当に嫌な思いをこらえつつ生活をしてきた。

戦争について誰かが「わが軍」という時、ナチの軍が彼女の軍であったことはないと感じる。文学や音楽などではドイツとの一体感もおぼえることがあるが、どうしても自身をドイツ人とは感じることはできなかった。しかし子供がいるので、イギリスに戻ることはなかった。

彼女たちの帰国はドイツで必要とされていると思っていた。そういう意味ではドイツへの帰国の不安はなかった。必要に迫られて何とか得ら

れた職（検事）は、悪いものではなかった。しかし、ロシアからの帰国組と西側からの帰国組の対応は異なったものであった。時が経つにつれ、そのようなことはなくなったが、帰国が奨励されたのにもかかわらず、当初西側からの帰国者に対しては疑いがかけられていた。ロシア帰国組の出世は早く、上位に立っており、また彼女たちは西のスパイでないことを示さなければならなかった。トロツキー主義者のことは知っていたが、関わるべきではないということも分かっていた。

彼女は「もし私がこの（社会主義国家建設の）実験がうまく行かないということが分かっていたら、ドイツには帰ってこなかっただろう」と手記<sup>33)</sup>に書いている。

#### ⑪ ハンス・ヘルツベルク（1921年生）

彼はイギリス軍の二等軍曹として、ドイツ軍捕虜の通訳などをした。その他、捕虜たちの再教育の任務にあたり、ファシズム崩壊の意味などを話した。

イギリス軍では、英連邦出身ではない志願兵は帰国することができたので、彼も帰国申請をした。この申請書にはドイツへの帰国も対象となるかどうかは書いてなかった。陸軍省では、ドイツについては何も書いてない、と言われたが、ヘルツベルクは書かれてはいないが、ドイツが含まれないとも書いてありませんと、応じた。担当官は「おや、そうです（Oh! No, I suppose not）」と言った。ヘルツベルク氏は筆者にきわめてイギリスの上流階級風のきどった口調でその真似をしてみせた。

家族とベルリンに帰るようという命令を受け取ったが、ベルリンに戻ったのは、妻がベルリン出身だったためである。1947年冬、軍艦に乗船し3歳の息子とともに帰国した。比較的早い帰国だった。ヘリッジからオランダのホックへ行き、さらに軍用列車でハノーヴァーに着いた。到着したのは夜だったが、この都市は完全に爆撃されており宿泊場所もなく、またそのままベルリンにも行くこともできなかった。イギリス軍憲兵の妻が自分たちのところで泊るように言ってくれたので、イギリス軍駐屯地の食堂に泊まることができた。食堂ではヘルツベルク一家がドイツ人だとは気がつかずに、イギリス・アメリカ合衆国・ポーランド軍の兵士たちが、それぞれ強いナショナリズムをかざしながら、どの国が戦争に勝ったのか言い合っていた。翌日ベルリンに行った。その冬は非



常に寒かった。

イギリスに残ること、あるいは豊かなアメリカ合衆国へ行くことは、ドイツへの帰国より魅力的ではあった。しかし「イギリスに亡命した共産主義者の人数より、FDJのメンバーが加わったことで、帰国した共産主義者の人数の方が多いということが雄弁に語っている<sup>34)</sup>。反ファシズム的民主主義の建設に加わろうとしたのが、私たちの動機だった。私は悔やんでいない。敗北の痛みは、私がドイツのためだけではなく、人類の歴史の試みに加わったということを考えれば、その痛みは和らぐ」と彼は手記に記している<sup>35)</sup>。

## 注

- 1) Karsten Schröder, *Zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend in Großbritannien (1939 bis 1946)*, Diss., (Rostock, 1987), 126-130; Alfred Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben, Erinnerungen und Dokumente zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend in Großbritannien 1939-1946* (Berlin, 1996), 222, 256-257.
- 2) Lothar Kettenacker, *The Repatriation of German Political Emigrés from Britain*, in: Johannes-Dieter Steinert/Inge Weber-Newth (ed.), *European Immigrants in Britain 1933-1950* (München, 2003), 117.
- 3) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 185; メンバーの出国先としてアメリカ合衆国の他、イスラエル/パレスティナ、デンマークが挙げられる。Ibid. 283; なお、フライシュハッカーが受けた別のインタビューによれば、かなりの数がイスラエルに行ったという。Henry Bernhard, *Die Geschichte der FDJ in Großbritannien*, *Deutschland Archiv, Zeitschrift für das vereinte Deutschland*, 38 Jg. 2005, Nr.1, 33-34, 40.
- 4) Kettenacker, *The Repatriation of German Political Emigrés*, 106, 110, 113, 115.
- 5) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 225-227; Schröder, *Zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend*, 145-147.
- 6) イギリス軍政下ではハンブルク、ドルトムント、ハノーファーなどにFDJが創設された。Bernhard, *Die Geschichte der FDJ*, 40; vgl. Michael Herms, *Zum Gründungsprozeß der Freien Deutschen Jugend in den Westzonen*, in: Helga Gotschlich/Michael Herms/Katharina Lange/Gert Noack, *„Das neue Leben muß anderes werden...“*. *Studien zur Gründung der FDJ* (Berlin, 1996).
- 7) Schröder, *Zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend*, 175; Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 228.

- 8) Schröder, *Zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend*, 170, 172, 174-175; Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 221, 230, 276-277, 282-283.
- 9) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 185-187.
- 10) Schröder, *Zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend*, 187-188; Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 25.
- 11) Karin Hartewig, *Zurückgekehrt. Die Geschichte der jüdischen Kommunisten in der DDR* (Köln, 2000), 264-268. 初期のFDJ指導層はモスクワ帰りではなく、ナチ時代に「普通」の暮らしを送った人々や、非法活動をしていた人々、刑務所や強制収容所に収容されていた人々、西側からの帰国者が多かった。
- 12) カールステン・シュレーダーとのインタビュー（於ロストック。06年8月30日）。シュレーダーがブラッシュからFDJについて話しを聞いた際の印象である。なお、ブラッシュはシュレーダーの博士論文の審査員の一人であった。60年代末、息子の一人が東ドイツ政府の政策に批判的行動をとり、逮捕されたため、失脚した。木畑和子「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち(6)」(『成城文藝』第207号、2009年。以降「連載(6)」第207号と表記、注21参照。
- 13) 1952年12月党中央委員のメルカー (Paul Merker。ナチ時代にはメキシコに亡命) が、アメリカ合衆国のスパイでシオニストであるとして告発された。
- 14) Walter Laqueur, *Geboren in Deutschland. Der Exodus der jüdischen Jugend nach 1933* (Berlin/München, 2000), 260-261.
- 15) 「連載(4)」第200号、171頁参照。
- 16) Helga Ehlert, Ich fühle mich nicht als Deutsche, in: Robin Ostow, *Juden aus der DDR und die deutsche Wiedervereinigung. Elf Gespräche* (Berlin, 1996), 178; vgl. Annette Leo, An diesem Verfahren stimmte was nicht, Südwestfunk Baden-Baden (29.03.2005).
- 17) Michael Uhl, *Mythos Spanien. Das Erbe der internationalen Brigaden in der DDR* (Bonn, 2004).
- 18) FDJのメンバーで同じく手紙の検閲業務に就いたエプシュタインは、引き続きニュルンベルク医師裁判の翻訳業務に携わった。彼女はドイツ人に民主主義をもたらそうとドイツへの帰国を考えていたが、ドイツが示した残虐さを受け止めることができなかった。またイギリスも両親との別れの記憶の場であるため、FDJのメンバーとしては資本主義のアメリカでは生活しなくなかったが、結局自分にわずかに残された親戚が住むアメリカに行くことになった。Hedy Epstein, *Erinnerung ist nicht genug. Autobiographie* (Münster, 1999), 121, 127, 129-132.

- 19) Ehlert, Ich fühle mich nicht als Deutsche, 177-178.
- 20) Ehlert, Ich fühle mich nicht als Deutsche, 179-182.
- 21) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 22.
- 22) フライシュハッカーは45年12月に結婚した。この結婚によって、ブラッシュと義兄弟になった（妻同士が姉妹）。
- 23) 「連載(2)」197号、106-107頁参照。
- 24) 「連載(3)」199号、124頁。
- 25) Kurt Gutmann (Hrsg.), *Wer möchte nicht im Leben bleiben... über Kurt Gutmann* (Berlin, 2006), 36-38, 40-41.
- 26) 「連載(2)」197号、115頁参照。
- 27) ヘルツベルク<sup>①</sup>によれば、ヨッヘン・ヴァイゲルトには演説などで人々を引き込む特別の力があったという。Vgl. Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 95.
- 28) Götz Aly, *Hitlers Volksstaat. Raub, Rassenkrieg und nationaler Sozialismus* (Frankfurt a.M., 2005).
- 29) Bernhard, *Die Geschichte der FDJ*, 40.
- 30) ORT とはアメリカ合衆国やパレスティナなどで新たな生活を開始するための英語教育や職業訓練などを行う国際的教育訓練組織。
- 31) イギリスのユダヤ人組織のイギリス中央基金 (Central British Fund) は、強制収容所生存者中の10代後半の子供たち（主に少年。ポーランド・チェコスロヴァキア・ハンガリー出身）732名を渡英させ、教育を与えた。Martin Gilbert, *The Boys. Triumph over Adversity* (London, 1996), 2; FDJの仲間のハンス・ヤコブスはドイツの名の下で行われた蛮行に対する償いとして、ヘンドラーとともにORTに参加し、英語を教えた。当初、子供たちはヤコブスたちと強制収容所で覚えた命令調のひどいドイツ語で話し、ドイツとドイツ語を憎んでいたという。Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 83-85, 116.
- 32) Gilbert, *The Boys*, 3.
- 33) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 106.
- 34) 亡命したKPD 党員の人数は300名を越えるが、そのうち何人がソ連占領地区に帰国したかは、帰国したFDJ メンバーの人数同様正確には分からない。しかし、両者をあわせれば、多くの共産主義者が帰国したということになろう。Werner Röder, *Die deutschen sozialistischen Exilgruppen in Großbritannien. Ein Beitrag zur Geschichte des Widerstandes gegen den Nationalsozialismus* (Hannover, 1968), 44.
- 35) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 96-97.

(本稿は2008年度成城大学文芸学部特別研究助成金による成果の一つである。)